

## 特集

# 聖路加と立教 ～リベラルアーツ教育における大学間交流の意義～

日時：2023年1月30日（月）16時00分～17時30分  
場所：池袋キャンパス6号館1階 全学共通教育事務室打ち合わせ室

参加者：

菊田 文夫（2022年度「いのちを健康で彩る智慧」コーディネーター／聖路加国際大学基盤領域（健康教育）准教授）

佐々木 一也（元全学共通カリキュラム運営センター部長（2014～2017年度）／立教大学名誉教授）

石渡 貴之（2022年度「いのちを健康で彩る智慧」コーディネーター／全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想・運営チームメンバー／立教大学コミュニティ福祉学部教授）

**石渡** 2022年度の夏に、聖路加国際大学と立教大学の初めての合同開講科目「いのちを健康で彩る智慧」が開講されました。この合同開講科目のスタートを一つの節目として、これまでの交流の歩みを振り返るとともに、それぞれの大学の教育者としての立場から、リベラルアーツ教育における大学間の相互交流の意義を考える場としたい、というのが本日の趣旨です。

ご存知のように、立教と聖路加はどちらも米国聖公会の宣教師によって創立された機関であり、ともに築地にルーツを持っています。現在、聖路加国際大学の敷地内には「立教学院発祥の地」の碑が据えられています。また、古くから人のつながりも深く、特に近年はさまざまな形で学術的な交流が行われています。



石渡 貴之

## 特別聴講（単位互換）制度について

**石渡** 学術的な交流として、まず立教では2001年度から「特別聴講制度」として聖路加の学生の受け入れを開始しました。この制度については、かつて全学共通カリキュラム運営センター部長（以下、全カリ部長）を務められた佐々木先生がご尽力されたところもあると思いますので、まずは全カリで聖路加の学生を受け入れるまでの経緯や苦労についてお話いただければと思います。

**佐々木** 私が全カリ部長を務めていたのは2014年度から2017年度の4年間です。従って、聖路加との従来の交流の最終段階ということになります。1994年度に全カリ

運営センターが発足し、1997年度にカリキュラムがスタートしましたが、一貫してかつての研究室員として全カリの運営に関わり続けてきました。2012年度に制度が変わった時から2〜3年離れていた時期もありますが、その後また全カリ部長となり、深く関わりました。聖路加国際大学と何かできたらいいよね、という話は前々からありました。同じ会派の大学であり、スクールカラーが似ていて、しかもお互いにはない専門分野を持つ大学であることから、「お互いのリソースを使ってより豊かにできたらいいのではないか」という意見が聖公会関係の教員や理事から挙がっていました。



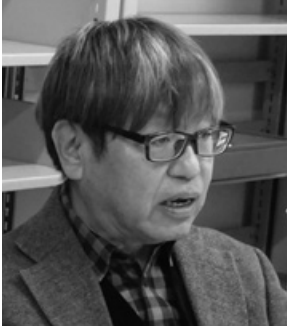
佐々木 一也

しかし、なかなかすぐには実現できませんでした。相互に自由に学生が行き来するというイメージでいたのですが、聖路加は男子学生が受け入れられないという問題がありました。施設上の問題もありましたし、規模がかなり違うのです。立教から学生がドドッと来られても困るということでした。それからもう一つネックになったのは距離です。聖路加と立教を往復すると1時間40分ほどかかります。学生からすると、移動にそんなに時間を使ってしまうのは……というのが、どうしてもあったのではないかと思います。結果的に聖路加の学生の受け入れは2001年度から始まりましたが、なかなか学生が来てくれないということが、最初は話題になっていました。どうしたらもっと来てくれるのかなど。その頃よく言われたのは、聖路加の学生たちは実習や必修科目が多いということです。必修科目がある日は動けないので、自由に動ける曜日が週のうち1日や2日に限られていたそうです。全カリの科目はたくさん展開されたものの、その全てが聖路加の学生たちの選択肢に入るわけではないという物理的な事情があったようです。時間をかけて池袋に行き、しかも少ない選択肢の中から本当に聴きたい科目となると、残念ながらそれほど多くの学生の関心にヒットしなかったということがありました。このように、一時期は延べ履修者数が10名にも満たないほど少なかったのですが、2018年度から50名前後に飛躍的に増えています。これは確か聖路加にお願いをして学生が来やすいようにしていただいたためだと思います。

**菊田** 当時は、火曜日を1日「立教 Day」とし、学生が自由に動きやすくなるよう工夫しました。

しかし、聖路加のカリキュラム上、1・2年次生しか履修ができないのです。4年次生にも立教の科目をぜひ取ってほしいのですが、途中で実習が入ったりするので、物理的に14回全ての授業には出席できません。そうすると、どうしても履修できるのは1・2年次生に限られてしまいます。これはわれわれのカリキュラム上の問題なのです。

**佐々木** 延べ履修者数は、2018年度は48名、2019年度は53名となっていますが、「せっかく立教に来るのだから2つや3つ科目を履修しよう」という学生がいるとすれば、実際に来られたのは20名くらいでしょうか。今後は、より多くの学生に来ていただきたいですね。



菊田 文夫

**菊田** 私より多くの学生に立教の講義を聴いてほしいと思っておりますが、カリキュラム上の問題がもう一つございます。年間の履修登録科目の単位数は45単位までという上限が決まっています。われわれの大学では必修科目が多く、かつ真面目な学生が多いため、聖路加の開講科目だけで45単位を超えてしまうことがあります。そうすると学外で単位を取れなくなってしまうのです。私は「野外活動実習」という体育の授業も担当しているのですが、「単位はいろいろなから履修させてほしい」という学生もいるのです。聖路加で一般教養の必要な単位をすでに取り終えてしまっている

ため、立教にお世話になる以前にブレーキがかかっている可能性があります。ですから、「立教大学にはこんな魅力的な科目がある」ということをさらにオープンにして、聖路加の科目と立教の科目を同じ土俵において選択をしてもらえるように工夫する必要があります。その一方で、そうした単位数の縛りがあるにもかかわらず、今年度は延べ75名もの学生が立教にお世話になっていることは、われわれとしてはすごいなと捉えています。

**佐々木** なるほど、そのような事情があるのですね。

**菊田** 聖路加の学生が履修した科目を見ると、人権や心理学、それも医療や臨床心理学とは違った一般的な話題についての話を伺いたいと考えていることが分かりますね。それから旬なテーマでいうと、SDGsにも興味を持っているようです。手話の科目も履修者が多く、これは聖路加にある手話部の学生ではないか、と思ったりもします。そういう学生が立教大学には魅力的な科目があるからぜひ行ってみよう、とお世話になっているのかなと思います。

**石渡** おっしゃる通り、聖路加の学生が履修している科目のカテゴリを見ると、多彩な学びの4カテゴリ「心身への着目」と5カテゴリ「自然の理解」に属するものが非常に多いです。心や生命など、医療に関する科目に、より興味があるようです。

**菊田** われわれは国際大学という名前を標榜していますが、単科大学ですから、こちら

が意識しなくても、どうしても看護・医療系の視点から社会の物事を見るという方向に向いてしまうものです。ですから心の問題も、別の視点から見るとどうなるだろうかということ、学生たちはかなり欲しているのではないかと思います。立教大学との単位互換制度で学生の視野が非常に広がっているという実感はあります。卒業生のアンケートでも、「立教大学との単位互換制度があってよかった」というコメントが入っているようです。

表：聖路加学生履修科目（例）

カテゴリ	科目名
1. 人間の探究	歴史への扉
	人権思想の根源
	手話と人権を考える
	現代社会における言葉の持つ意味
2. 社会への視点	SDGs×AI×経済×法
3. 芸術・文化への招待	美術の歴史
4. 心身への着目	認知・行動・身体
	心の科学
	パーソナリティの心理
	心の健康
	身体パフォーマンス
	ストレスマネジメント
	アンチエイジングの科学
5. 自然の理解	生命の科学
	身近な物質の化学
	地球の理解
	生物の多様性
	脳と心
	オーダーメイド医療最前線

## 聖路加の専任教員による「人間と看護」を開講

**石渡** 2002年度には、聖路加の専任教員7～8名によるオムニバス形式の科目「人間と看護」が立教の全カリとして池袋キャンパスで開講されました。この科目は、その後17年間続きました。履修者数は新設当時には100名を超えており、学生による授業評価アンケートでは、かなりの高評価を得ていました。しかし、2010年度に総合系科目の履修区分が一部変更となったのを境に、一気に半数ほどになってしまったようです。

**佐々木** 2012年度から総合教育科目（現：総合系科目）のカリキュラムが大幅に変わり、非常に複雑なカリキュラムになってしまったのです。学部によって違うこともあって、この科目が埋没してしまったということが考えられます。

**石渡** 菊田先生は、「人間と看護」の担当教員から、科目設置当時のことを聞かれたことはありますか。

**菊田** 当時は本学が「聖路加看護大学」だった時代だと思うのですが、その時代は「人間と看護」の位置付けが、看護系教員の担当科目というイメージがあり、一般教養の教員はあまりタッチしていませんでした。当時の看護学部長や教務主任が立教大学を訪ねて、「医療系の知識や情報、考え方に触れる機会があまりない立教大学の学生にとって価値のある内容なので、ぜひ履修してもらいたい」という趣旨で科目を提案したと聞きました。看護系の教員の中にもいろいろな専門分野があります。そのため、毎年1人の教員が輪番制でリーダーを務めて全体をコーディネートしながら、看護の各分野の先生方の話をオムニバスで学生に聴いていただく科目として運営してきたようです。

**佐々木** もともと、科目担当者は1人という前提で聖路加国際大学からご提供いただく科目として枠を固定し、いろいろな先生にやっていただくというイメージがありました。しかし、聖路加側のご都合で、オムニバス形式で毎週違う先生が出てくる形に落ち着いたのではなかったかと思います。この科目を置いたのは、聖路加が施設上の問題により立教の学生を受け入れられなかったという背景もありますが、立教の学生から見ても、聖路加国際大学は姉妹校なのだという象徴的な意味合いもありました。結果的にオムニバスでやっていただいたのは良かったと思います。毎年交代で1人が担当すると他の科目と同じようになってしまいます。また、毎年担当者が変わることで、良い意味でも悪い意味でも、学生が先輩から得る情報がなくなってしまいます。情報がないというのは、履修者が集まらないことにつながります。必ずしも、楽勝だからたくさん集まるということだけでなく、「この科目は面白いよ」という情報もあるのです。今になっては、毎年変わってしまったらむしろ良くなかったのかなと思います。

**石渡** 確かに、看護の中にも専門分野があって、多くの先生からさまざまな視点の話が聞けるというのはとても良いと思います。

**佐々木** 「人間と看護」の授業評価アンケートでは、「授業の進め方」や「授業から得ることができたもの」という最も大事なところが、他の科目に比べて圧倒的に良い評価を得ていました。このようなことから、立教の学生のためになる話をとても熱心に行っていたことがうかがえます。

**石渡** 立教にはない看護という視点から、健康や死、もしくは生を考えるとという形が、立教の学生にとって良かったのではないかと思います。それから、聖路加の教員も授業を通して立教の学生から多くの刺激を受けたということです。普段、医療系の学生にし向き合っていないために、立教の一般的な学生からのコメントやリアクションペーパーから気付かされることが多くあったようで、双方にとって良い授業であったというのがよく分かりました。

ただ、聖路加の受け入れ体制が整ったことを一つのきっかけに、この科目を閉講し、2019年度から「教養の扉をひらく」と「宇宙から地球のみらいを考える」の2科目で、立教生の送り出しがスタートしました。これですべてに双方向の特別聴講制度が実現したわけですが、この2科目を立教生に開放することにした経緯や科目の内容について、菊田先生に伺いたいと思います。

## 「教養の扉をひらく」「宇宙から地球のみらいを考える」の2科目で立教生の受け入れを開始

**菊田** 実は「教養の扉をひらく」は、聖路加では「総合科目」という科目名で2017年度から開講しました。この科目は、当時聖路加の理事長であった糸川川順氏（元立教学院理事長（2007～2014））が、「もう少し教養科目の幅を広げなければいけないのではないか。せっかく立教大学に単位互換制度でお世話になっているのだからもっと利用すべきだ。また、聖路加でも独自の教養科目を提供するといいいのではないか」とずっとおっしゃっておられたことをきっかけに構想が始まったようです。

ご縁があり、私が科目をつくることになったのですが、オムニバス形式で、さまざまな分野で活躍しておられる社会人や、社会の第一線で実践しておられる専門職業人のお話を伺うことにこだわってみようという科目を設計しました。科目の構想時は、どうしたらよいか悩む部分がたくさんありました。そこで、私が大学院の時にお世話になった、立教大学名誉教授の寺崎昌男先生にご相談したところ、「こういうのが面白いのではないか」といろいろなアドバイスをいただきました。そして寺崎先生が「僕も話をしますよ」と言ってくださいました。こうして、はじめに教養の大切さに関するお話を寺崎先生にさせていただき、そこからさまざまな先生のお話を伺って、最後にそれらを振り返るというスタイルができていったのです。佐々木先生のご専門の哲学に関しても、聖路加の学生にも絶対に聴いてもらいたいと思い、「総合科目」に強引にお誘いしたという経緯があります。

また、「宇宙から地球のみらいを考える」に関しては、寺崎先生が「昔の大学では天文学をリベラルアーツとして学んでいた」とおっしゃっていましたが、気が付けば天文学は聖路加の開講科目にはありません。そこで、天文学で最先端の研究をしている方と触れ合う機会をつくり、学生に天文学の素養を身に付けてもらいたいと考えました。これもご縁で、2018年度の「総合科目（教養の扉をひらく）」の授業に国立天文台元台

長の海部宣男先生がお話しに来てくださったのです。その際に海部先生にご相談したところ、「野辺山宇宙電波観測所の立松健一所長をご紹介しますので、彼に相談してみたらいかがですか」と応えてくださいました。そして立松先生にお会いしたところ意気投合して、今に至っているわけです。この2月にも野辺山で集中講義を開講します。ここではブラックホールを研究しておられる先生や、電波天文学を専門にしておられる先生など、かなりマニアックな内容ですが面白い先生方に、自分たちの研究テーマがどういう意味を持つのか、また天動説や地動説といった基本的で大事なところもお話しいただきます。さらに集中講義の最後には、聖路加の学生も立教の学生も、1人5分のプレゼンテーションを行うことになっています。天文台の先生3人と私との4人で、受講生のプレゼンテーションを大いに楽しみながら聴きたいと思います。2019年度はコロナ流行の直前だったため、野辺山の天文台で開講することができました。その際の課題が、「ブラックホールが怖くて眠れない子どもをどうなだめるか？」という、とても面白いお題でした。受講する学生が天文学を専門とする学生ではないものですから、楽しく学べ、かつ印象に残るような授業を組んでくださって非常にありがたく、私も一緒になって楽しみました。

**石渡** 科目の設置背景や内容がよく分かりました。この2科目はどちらも立教の学生からの評判もよく、例年、定員に対し100%以上の履修申請があるようです。

## 合同開講科目「いのちを健康で彩る智慧」設置の意義

**石渡** 先ほどのお話を伺うと、やはりオムニバス形式であったり、スペシャリストからのお話であったりというのが、今回新たに開講した合同開講科目につながっているように思いました。

**菊田** そうですね。最初は「教養の扉をひらく」を開講するなかで、せっかく立教大学の膨大な知的財産があるのだから、それを聖路加の学生のためにもっと生かすことができないかと考え始めたことがきっかけです。そこでわれわれが大切にしている「健康」や「いのち」といった大きなテーマについて、いろいろな視点からみんなで考えて議論する場をつくりたいと思いました。そして立教大学の先生方にご提案申し上げようとお会いしたのが佐々木先生だったのです。営業マンが飛び込んできたような感じで、はじめは佐々木先生もびっくりされたのではないかと思います。しかし、佐々木先生はしっかりと受け止めてくださいました。

**石渡** 「教養の扉をひらく」や「宇宙から地球の未来を考える」も踏まえながら、それぞれでなく合同で、という提案が佐々木先生にあったのですね。その後、開講に至るまでは苦労もあったと思います。佐々木先生が最初に話をお聞きになった時、合同開講



科目を設置することについてどのように捉えられたのでしょうか。

**佐々木** 最初に話を伺った時、これは良い話だと思いました。同じ聖公会系の大学で都内にあるのだから、仲良く学生の行き来を行うことができればいいなと思っていました。そのために、一緒に科目を開講するのがやはり一番良いと考えていました。

特に立教はリベラルアーツを重視している大学です。学部があり、強い専門性のある大学院を持っているわけですが、真の高等教育を受けた専門人は、しっかりとした教養を持っていないと、その専門性を社会的に生かせない。下手をするとマッドサイエンティストのような人を輩出してしまいます。それでは本末転倒だという意味合いです。かつて専門教育の人々は「教養を持った専門人を育てる」というイメージを持っていたのですが、初代全カリ部長の寺崎昌男先生が全カリをつくられた時に、『「専門性を持った教養人を育てる」、それが大事なのだ』とひっくり返しておっしゃっていました。私も、本来、4年間の学士課程教育はそういう趣旨で行われるべきだと思います。立教は、リベラルアーツを建学の精神として創立時から重視してきましたので、「専門性を持った教養人を育てる」ことが実現しやすい大学だと思いました。そのためには、いろいろな分野をただ幅広くつまみ食いするのではなく、また複数の分野が独立するのではなく一部融合したような科目、つまり、学際的な分野に知見がある人たちを集めて、それぞれの分野が他分野とつながりながら、総合的な知的活動としての日常生活や職業生活をどう成り立たせているのかを教えてくれる、そういう授業科目が欲しいと思っていました。それぞれの専門性の話をしながら、「隣の分野とこういうふうにつながっていくのですよ。現実的にはこういう形で使われ、生きているし、こういうことを見逃しているから駄目なのです」といったことを話すのが大切です。これは1人の先生が個人で担当する科目でもできなくはないのですが、専門性を強く持っている先生方は、やはり自分の専門の話をしたいです。ですから、あえてそうではない、コラボレーションする授業が必要なのです。そのためにコラボレーション科目(2011年度までの科目区分名称は「総合B」、2012～2015年度は「主題別B」)を全カリ立ち上げの時に作りました。この取り組みを他大学とやった方が、異質でより効果的ですよね。他大学といっても、縁もゆかりもないところだと必然性が見えない。同じ聖公会の精神で作られている学校で、キリスト教に基づくスクールカラーがある大学同士が連帯して、より豊かな教養性を育てる効果的なコンテンツをつくれるといいなというのは、ずっと思っていたのです。

そこで聖路加国際大学の方から、そういうことがやりたいと聞いた時は、これはもう大変ありがたいことだと思いました。ただし、私が良いと思ってても、立教の他の先生方が全員そう思うわけではないのです。他大学とどうやってコラボするのだ、誰がコーディネーターをやるのだ、コーディネーターを立教側と聖路加側で2人立てるのか、それだと船頭多くして船が山に登ってしまう事態になりかねないのではないかとといったいろいろな懸念がありました。全体をうまく統括できる人が、聖路加の専門性を生かした上で、立教の全カリの中で位置付けていくということですから、個々の授業者とコーディ



ネーターとの関係が有機的につながっていないと実現できません。これは学内のコラボレーション科目よりもさらにハードルが高いのです。コーディネーターに期待されることは、科目担当者を全員よく知っていて、この人とこの人がコラボしたらこういうことができそうだ、というようなビジョンがあること。かなりハードルが高いものでした。私は「前向きに検討して実現していきましょう。応援します」と申し上げましたが、そのまま私は全カリ部長を2017年度で退任しました。その後は後任の全カリ部長に託して、今年度ついに実現したという形です。

**石渡** 話を伺うと、佐々木先生のおっしゃったことを菊田先生が取り入れて、今回実現できたように感じます。

**菊田** 佐々木先生からはとても前向きなアドバイスをいただいて、なんとかやってみましょうという姿勢で背中を押していただきました。さまざまな専門分野の先生方が議論する場に学生も参加して学ぶことに意味があるのだということは、佐々木先生が折に触れておっしゃっていました。

**佐々木** 先生方が授業で異なる分野の話をする、学生はそれぞれが全く関係ないものだと思うのですね。それらがどうつながっているのかということ、教員同士が努力し合って接近して見せることが重要です。つまり、新しい気付きや知見が生まれる場に立ち会うことで、学生は学問というのはただ人の話を聞くだけではなく、自分から積極的に関わって新しい気付きや知見を作っていくものなのだと体験できるので。

**石渡** この科目は、Health Humanities がテーマになっています。幅広く多くの人が関わるというコンセプトを菊田先生がつくられたのだと思いますが、Health Humanities という点は最初から意識されたのでしょうか。

**菊田** Health Humanities は、佐々木先生にいろいろご相談申し上げながらこの合同開講科目をつくっていく過程の後半に出てきたものでした。ですから、私にとっては Health Humanities は、あくまで後付けという感じです。私は科目を設計する過程において、この科目に自分が期待することは何かを考えました。一つは、学生の皆さんに学ぶ楽しさを伝えたいというものがありませんでした。やはり学ぶことは楽しいではないか、面白いではないか、これが大学教育なのだと感じています。今の学生はとても真面目で、授業にきちんと出てレポートもきちんと書くのです。学生も一生懸命だし先生も一生懸命授業をしておられるけれど、一方でそれで楽しいのかなと思ったのですね。勉強をしてレポートを書いて試験を受けることが学問ではありません。佐々木先生がおっしゃったように、いろいろな分野の先生方の話を聴いて、「それ面白いね、やっ

てみようよ!」という新しい知の誕生の瞬間を垣間見る。そういった授業が学生にとっては楽しいのではないかと思い、まずはそれができる機会をつくりたいと考えていました。

「健康」や「いのち」というのはとても幅広い概念です。われわれの大学では「健康」や「いのち」というと医療系・看護系の内容に絞って伝えてしまいがちですが、天文学にも、実は「いのち」と関係する研究課題があります。例えば国立天文台には、宇宙でひたすらアミノ酸を探しておられる先生がいらっしゃるそうです。つまり、アミノ酸という人間のルーツを宇宙から見つけ出すことを考えていたりするわけです。数学でも、数学の美が「いのち」と関係するところも出てくるでしょう。このように、そもそも生きているとは何だろうとか、人間はどこから来たのだろうとか、人間がこの地球上で仲良く生きていくのにどうしたらいいかといった、生きることや自分のルーツを考える中でさまざまな学問が生まれてきたというイメージが、私の中にありました。「健康」や「いのち」に関係する、ある一つの分野だけを学ぶというよりは、バツと大風呂敷を広げて「いのち」を俯瞰的に眺めてみる。そして、ある程度コーディネーターの方でいろいろな先生同士の接点、つまり一見全く関係のないような分野の先生方が集まっているけれども、こういう視点で話ができるのではないかというのを、学生にヒントとして提示する。そうすると、授業に参加した学生が、自ら学問的なつながりを見つけていく。学生自身が「この学問ってこういうつながりが面白いよね」と気付く。そういうことを自分で考えてもらいたいと思ったのです。

そのきっかけは何かといいますと、「総合科目（教養の扉をひらく）」ができる前に、別の教職系の授業でディスカッションをする場をつくったときに、学生から衝撃的な一言をもらったことにあるのです。「このテーマについて考えてみましょう」と言ったら、一人の学生が真面目な顔をして「先生、考えるのが面倒くさいです」と言うのです。これは本音ですよ。おそらく、今は Google などですぐに答えを出せるものですから、考えなくても探せばどこかに答えはある。それに慣れているために自分で考えることが面倒くさいのです。しかし、このような授業の中だと、みんなで議論をしたり、考える楽しさが出てくるでしょう。そのため、今回、立教セカンドステージ大学の受講生に来ていただいたのはとても良かったです。自分たちとは異なる世代の異なる考え方に触れることは、大きな刺激となります。そして、深く内省することで、自分と他者は違う考えだという個性も出てくるし、そこから自分の社会的な役割に気付くことができるのです。

それからもう一つ感じていたこととして、立教も聖路加も偏差値が高い学生が多く、受験の時も一生懸命勉強をしてきています。そのため、知識はたくさん頭の中に入っていますが、その一方で弊害もあり、いわゆる「知っているつもり」になりがちです。天文学というのはこんなものだよねとか、星はこんなものだよねと、高等学校の物理や生物で習ったことが邪魔をして「私は知っているよ」と思ってしまうのです。大学における学びで、どれだけ先生が画期的で面白い話をしてくださっても、「私は知っている

よ」と思った時点で新しい考え方を受け付けなくなります。それは非常にもったいない。「知っているつもり」にならないで、素直な目で、例えば幼い子どもが何にでも目を輝かせて面白がるように感受性を高めてほしい。また、多くの先生からのお話を伺って、学生自身の人生に挑戦する勇気を引き出してもらいたいという考えがありました。

このような思いがあって、聖路加の学生も立教大学の皆さんとともに、学問をみんなで楽しめる雰囲気づくりを考えて、こういう授業の形に落ち着いたように思います。

**佐々木** 今、先生のおっしゃった趣旨を生かすために、「いのち」を前面に出したのは大変良いと思います。「健康で彩る」という形容詞は入っていますが「いのちの智慧」、これは人間が知的に営む根本です。生きるためにいろいろなことを考えて、調べて、組み合わせて、試行錯誤をしている。全て生きるためなのです。それは自分の「いのち」が生きるためだけではなく、同時に生きている他者の「いのち」でもあるし、未来の世代の「いのち」のためでもある。それが人間の営みです。それを組織的により効果的に行うための技術も必要ですが、生み出す元となるのはやはり知識の研究なのです。そのため、「いのちの智慧」は、まさに菊田先生がお話された内容をやるのにふさわしいテーマだと思います。

**石渡** 私も最初にこの話をいただいた時に、やはり「いのち」というのがとても響きました。私が所属するコミュニティ福祉学部テーマに「いのちの尊厳のために」があります。また、健康もスポーツの最も重要な使命ですから、これはもう私のためにあるようなものではないかと思い、コーディネーターを引き受けました。

先ほど佐々木先生から、コーディネートが大変だという話がありました。今回、どのようなメンバーが良いのだろうと考えましたが、教員の選定では同じスポーツウエルネス学科ではつまらないだろうと考え、他学科から2人の先生に登壇いただきました。また、現代心理学部も「いのち」に関連が深いので、そちらの先生にも来ていただきました。授業後に教員同士で話したのですが、お互いにFDをやっているような感覚がありました。同じ学部にも、他の先生の話じっくり聞く機会はなかったので勉強になりました。また、先生方によって捉え方が異なる、幅広い視点から「いのち」やHealth Humanitiesを考えることができたのも良かったと思います。

受講生の授業での様子もとても熱心でした。立教の学生は幅広い学部で学年も違って、さらにそこに聖路加の学生とセカンドステージ大学の受講生が加わるという形で面白かったです。印象に残っているのは、経営学部の4年次生が最後に菊田先生と私のところに来て、「今まで受けた授業の中で一番面白かったです。他のみんなにも伝えたいです」と言ってくれたことです。何が良かったのかと聞くと、このような異年齢や他学部生との話し合いの機会があまりないからということでした。最終レポートを全部読み直したのですが、受講生が大変有意義な4日間を過ごすことができたのだと改めてよく分かりました。学生自身が考えるという点もしっかりと実現できていたようで、



われわれが考えていたところを伝えられたのではないかと思います。菊田先生は実際の授業を振り返っていかがですか。

**菊田** 非常にわがままな話で恐縮ですが、この科目をつくる上では、第一に私自身が楽しめることを重視しました。学生の皆さんに楽しんでもらえないと私は楽しめないし、登壇してくださる先生方がつまらなかつたら残念なので、先生方にとっても面白いものであったり、お土産を持って帰れたりすると良いと考えました。実際に授業をやってみて、楽しかったです。4日間にあれだけ内容を詰め込んだので、大変だったと思うのです。しかし、学生も疲れ果てた様子はなく、むしろ楽しんでいたのだなという感覚があります。

それから、先ほども申し上げましたが、セカンドステージ大学の受講生たちの存在がとても良かったですね。私の中で象徴的だったのは、受講生の中に、企業で長らく最先端の分野で活躍され、計画やスケジュールを立てることに長けておられた方がいらっしゃったのですが、初回授業のリアクションペーパーでは「目標設定がしっかりしていない」と、とても批判的だったのです。会社ではこうやっています、といったことが書かれていました。それが日を追うにしたがって柔和になっていき、新しい世界を分かってもらえたのだなと思いました。最初は、若い世代の皆さんもシニアの皆さんも、お互いに少し遠慮しているように感じました。若い人たちはシニアの人たちに話をしたら説教されるのではないかと、シニアの人たちは若い人たちに話をしたら煙たがられるのではないかと、そういう思い込みがあったようなのです。このような思い込みが融けて、お互いが必要とし合っていることに気付けたところも、この授業の成果の一つだと思います。

表：2022年度「いのちを健康で彩る智慧」授業計画

立教大学池袋キャンパス	8/1	履修 オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・科目運営教員からのメッセージ</li> <li>・この科目のねらいと履修者へのお願い</li> <li>・アイスブレイキング / グループディスカッションのためのグループづくり</li> <li>菊田 文夫 (コーディネーター/聖路加国際大学・基盤領域 (健康教育))、</li> <li>石渡 貴之 (コーディネーター/立教大学・コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科)</li> </ul>
		【第1セッション】 「Health Humanities」の現状と将来展望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第9回国際ヘルスヒューマニティーズ学会から得たもの</li> <li>井上 麻未 (聖路加国際大学・基盤領域 (英語))</li> <li>・ヘルスヒューマニティーズ研究の国際的動向</li> <li>Jeffrey Huffman (聖路加国際大学・基盤領域 (英語))</li> </ul>
		【第2セッション】 人類の「過去」そして「現在」から「未来」を俯瞰する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人類の未来を拓く哲学的教養 ー自律的思考力の涵養</li> <li>佐々木 一也 (立教大学・名誉教授)</li> <li>・ゲノムにとって「わたし」とは何か?</li> <li>太田 博樹 (東京大学理学系研究科・生物科学専攻・ゲノム人類学研究室)</li> <li>・人類のルーツを探る電波天文学</li> <li>立松 健一 (国立天文台野辺山宇宙電波観測所)</li> </ul>
	8/2	【第3セッション】 「健康」と「いのち」の価値を高める	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生きかたを創造する「健康教育」</li> <li>菊田 文夫</li> <li>・生活環境に適応するところとからだ ー環境生理学の視点から</li> <li>石渡 貴之</li> <li>・心の健康を考える ーカウンセラーとして想うこと</li> <li>原 信夫 (立教大学・現代心理学部心理学科/学生相談所カウンセラー)</li> </ul>
		【第4セッション】 健康な社会を構築するために	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「いのち」と「健康」を伝えるメディアの現状と課題</li> <li>井川 充雄 (立教大学・社会学部メディア社会学科)</li> <li>・共生をめぐる多様な思想 ー公共哲学の視点から</li> <li>権 安理 (立教大学・コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科)</li> <li>・福祉のちから ーホームレス問題と民間団体による (医療) 支援の実態</li> <li>後藤 広史 (立教大学・コミュニティ福祉学部福祉学科)</li> </ul>

聖路加国際大学	8/3	<p>【第5セッション】 新興感染症と向き合う</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・疾病構造の歴史と公衆衛生学の取り組み 菊田 文夫</li> <li>・感染症とのつきあいかた ―感染症との共生の可能性を探る 坂本 史衣（聖路加国際病院・QI センター・感染管理室）</li> <li>・感染症の診療を通して ―患者から学ぶ 古川 恵一（国保旭中央病院・感染症センター）</li> <li>・感染予防と創薬に光明をもたらす世界最高速のスーパーコンピュータ「富岳」 伊藤 伸泰（国立研究開発法人理化学研究所・計算科学研究センター）</li> </ul>
		<p>【第6セッション】 人びとの「健康」を支える医療専門職者のはたらき</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者や家族を支える「気持ちよさ」をもたらす看護ケアとは？ 縄 秀志（聖路加国際大学・看護学部・基礎看護学）</li> <li>・病と共に生きる人びとに寄り添う全人的ケア 中村 めぐみ（聖路加国際大学 PCC 開発・地域連携室・がん専門看護師）</li> <li>・死にゆく人びとに寄り添うスピリチュアルケア 上田 憲明（聖路加国際病院・キリスト教センター）</li> </ul>
	8/4	<p>【第7セッション】 人びとを病から救う 生きた有機体にふれる</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・聖路加国際病院の理念と組織／地下鉄サリン事件をふり返って 石松 伸一（聖路加国際病院）</li> <li>・聖路加国際病院の紹介 中村 めぐみ</li> </ul>
		<p>【第8セッション】 社会の健康を高めるヒント この授業をふり返って</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シニアの社会参加を促す取り組み 木下 康仁（聖路加国際大学・基盤領域（社会学））</li> <li>・Health Humanities が人類に貢献できること（討論・ふり返り・分かちあい） 菊田 文夫、石渡 貴之</li> </ul>

**石渡** レポートを読むと、お互いをリスペクトしていることが読み取れましたね。それは私もすごく良かったと思います。

また、立教の学生から聖路加の学生に対しては、医療で頑張っていくという真面目さに刺激を受けたというコメントが多かったです。本当に真面目に学んで、人々の役に立ちたいという意志を強く感じました。



**菊田** 聖路加の学生からは、聖路加だけでは知り得ないこと、感じ得ないことを学ぶことができたというコメントがありました。社会にはいろいろな方がいて、いろいろな価値観や考え方があることを実感できたようです。

**佐々木** 異質なものと出会うと、自分を外から見直すことができるのですよね。大学の中だけでは気付かないことに、たくさん気付かされます。もちろんネガティブなことにも気付くのですが、自分がやっていることが実はこれほど意味があるのだと、ポジティブなことに気付けることもある。そういった意味でも、他学科・他大学で、異なる専門の人々と交流ができる、さらには異世代とも交流できるというのは良いですね。

## 合同開講科目の今後の展望

**石渡** 今回、合同開講科目の開講が実現できましたが、今後どういう方向性を目指すのか。またそこにどのような意義があるのかというところをお聞きしたいと思います。

**佐々木** 先ほども申し上げましたが、立教大学はリベラルアーツを根幹としている専門性のある大学であり、「専門性を持つ教養人」の育成を目指しています。聖路加国際大学は分野の性質上、どちらかという専門性の方に重きを置いたカリキュラムとなっており、おそらく「教養のある専門人」になるのでしょうか。そういった意味では、立教と聖路加は同じミッション系の大学でつながりをご縁はあるのですが、輩出する学生像には若干の違いがあります。それが聖公会ということで連携できるというのは、双方の大学にとって利点だと思います。異なる大学との交流は、知的刺激に非常に効果的なのです。

ようやくこういった科目が始まり、良いことだと思いますが、同じ科目のスタイルでずっと維持していくと、経年劣化現象が起こってしまいます。そのため、何年かに一度、ドラスティックにコンセプトを変えた科目に変更してみる。いくつか候補を作って、ローテーションで開講しても良いと思います。「いのち」の科目は大変優れたコンセプトだと思いますので、このコンセプトは大事にして、飽きてしまったら違うものを間に挟んでリニューアルすれば、またパワーアップすると思います。そういうことを回していけるように、両大学の教員の人的つながりを作って、維持していくのが今後の課題ではないかと思います。

**石渡** ありがとうございます。菊田先生、いかがでしょうか。

**菊田** 先ほどから申し上げますけれども、われわれの大学の学生に学ぶ楽しさを知ってほしいという思いがあります。授業をきちんと受けてきちんとレポートを書いて単位をもらって卒業するだけでは高校の延長になってしまいます。せっかく大学で高等

教育を受けるのだから、学問というのがそのような高校の延長だと思われるのはもったいないと思うのです。そうではない刺激を与える科目として、この科目の存在価値があるのかなと思っています。

看護学部には学ぶべきことがたくさんあるので、学年が進むにつれて、いやが応でも専門性を追究する方向に向かいます。しかし、いったん国家試験をパスして臨床の現場に出れば、今度は今までのような勉強だけでは物足りない。患者さんにはさまざまな価値観を持った方がいらっちゃって、その患者さんに向き合えないといけないのです。自分のおじいちゃん、おばあちゃん世代の方とも話をしなければいけない。そのような時に力になるのが教養だと、私は思っています。そう考えると、やはりこの科目で、いろいろな専門性を有する先生方にご登壇いただき、一見違った価値観を持っていらっしゃる先生方が多角的な視点から議論すると、こんなふうに新しいものが生まれてくるのだということを少しでも感じてもらうことが重要です。学生自身も、自分の意見を言って、意見の違う人と交流して、新しいものをつくっていただけるのではないかと感じてもらいたいと思います。

また、今年度科目を開講してみて、セカンドステージ大学の受講生との交流が一つのポイントとなっていました。というのも、セカンドステージ大学の受講生も大学生も、実は同じテーマを目の前にしているのではないかと思います。学生は卒業し、社会人として新しい世界に飛び出す。シニアの方々は第一線を退いて第二の人生に飛び込まないといけない。生活スタイルが変わるので、年代は違っても、同じような目の前の不安に向き合っている方々だと思うのです。そのような方々が交わる場を持つというのは、とても意義があると思っています。先ほど石渡先生がおっしゃったように、若い人を応援したいというシニアからのメッセージを受け取ることができたり、大学生が憧れるシニアとともに学べる授業の場が、世代間交流へとつながっていく。これが可能な環境は、立教大学の財産だと思うので、セカンドステージ大学という資源をもっと生かしてみたいと個人的には考えています。

**石渡** ありがとうございます。菊田先生は学ぶ楽しさとおっしゃいましたが、今回、私自身は教える楽しさも学ぶことができました。また、私はまだ経験が浅く、全カリのことはほんの一部しか分かっていませんが、全学共通科目の重要性という点で、今回一緒に授業を行った学部内の他学科の先生方と同じ方向を向くことができたのではないかと考えています。今後、聖路加と一緒に科目を開講していくことで、学内全体も同じ向きに向かって、リベラルアーツの重要性についての認識をもっと高めていきたいと思っています。

科目の劣化が起きないように、というのも非常に重要です。飽きないように劇的に変えて、その時にまた何が作れるのかということは、ぜひ今後考えていきたいと思いません。

**菊田** 私も楽しい、先生方も楽しい、学生たちもみんな楽しいというのが重要です。私が大学院の学生だった頃は、そういう経験が多くありました。先生たちも全力で学生に向き合っていたし、学生たちも全力で先生を批判していた。そういうことを経験してきたので、学生が先生の前で自分の意見を自由に話せて、それを分かってもらえるという経験も大切だと思っています。また、私もずっとこの科目を担当し続けるわけではないので、誰かに託して、また新しいものをつくっていただいてもいいですね。

**石渡** ありがとうございます。2001年度からの特別聴講制度に始まり、20年を超えて合同開講科目がスタートしました。両大学の人的つながりもできたところなので、またこれをどんどん深めていきながら、最終的には学生ファーストでどうということが提供できるのかを考える。そしてその際には、われわれが楽しみながらという点も忘れないように、というところを今後目指していければと思います。

## 教員同士の交流も

**菊田** 大学間の交流として、いずれ、われわれと立教大学の先生方とでFDの交流会のようなものを開催できたら良いですね。教養ということに視点において、両大学の先生方のお話を伺い、一緒に議論をするような機会をつくっていければいいのかなと思いました。

**佐々木** とても良い案ですね。私が一番必要だと思うのは、「大学に教養教育なんていない」という先生の話聞くことです。教養という概念の捉え方の違いで、いろいろな意見が出てきてしまいます。それを擦り合わせて、どういう意味で無駄なのか、どういう意味で必要なのかということ、多くの人でシェアできるような関係ができると良いなと思います。

**菊田** アメリカのように、リベラルアーツを学んでから医学部のような専門教育を受けるというシステムにのっとると、どうしても教養教育と専門教育を分けて考えがちです。同じ大学という高等教育機関の中に、専門教育と教養教育が同居している、この特徴を学生の成長に生かすという視点で議論できたら面白いですね。

**石渡** 本日は、これまでの交流を振り返り、改めて大学間交流の意義を考えることができました。今後は授業にかかわらず、教員同士が交流する機会も積極的に作っていきたいですね。本日はありがとうございました。